

日本英文学会第 79 回全国大会（於 慶應義塾大学三田校舎）

特別講演「中世と中世主義を超えて」（5月20日(日)午後1時半 於西校舎ホール）

慶應義塾大学文学部教授 高宮利行

5月19-20日、日本英文学会の第79回全国大会が慶應義塾大学の三田キャンパスで開催されます。大学紛争が荒れ狂った1971年には、5月ではなく12月初旬に第43回全国大会が三田で開催され、助手になりたての私は事務局の使い走りをやっていたのを走馬灯のように思い出します。おそらく厨川文夫先生が退職間際だったので三田での開催をお引き受けになったのでしょうか、若輩の私にとっては著名な学者を知る絶好の機会となりました。

そして、定年まで2年を切った今年、私は特別講演までさせていただく光栄を担うこととなりました。早々と「中世と中世主義を超えて」という漠然としたタイトルを考えたのですが、その背後には2006年の新チョーサー学会での、デイヴィッド・ウォレス教授の会長講演があります。現在最も優れた中世英文学者の一人として知られる同教授は、チョーサーがいかにか全世界でさまざまな形で受容されているかを、インターネットを駆使して調べあげ、現代批評理論で分析したものでした。また学会中「Wikipediaを用いていかにかチョーサーを教えるか」という部門もありました。誰でも参加できるインターネット版百科事典ですから、信頼性が低いのではと考える向きもあるでしょうが、チョーサー関係については英米の大学・高校の教員が加筆修正しているためか、正確度は高いのです。また情報も早いです。私はなるほど便利なものだと感心し、それ以来研究のためのインターネット検索には熱が入るようになりました。

さて、大学で担当する英文学史の冒頭で古英詩『ベアオウルフ』を紹介する際、私はこの英雄の怪物退治と渡辺綱の羅生門での鬼退治を比較することにしています。この比較をした最初の学者が日本人ではなくイギリス人だった、しかも1901年と言う早い時期だったと伝えると、学生は衝撃を受けます。彼らの多くは、忠臣蔵と並んでわが国で人気のあった綱の鬼退治の話を知らないからです。また『ベアオウルフ』の物語にふさわしい浮世絵の挿絵を付けた『浮世のベアオウルフ』(1995)を紹介し、これを制作したのが日本人ではなくアメリカの学者だと告げて、この種の研究は我々がやるべきではないか、と学生をけしめることにしています。

これらの例が示唆するものは重要だと思われまふ。わが国で『ベアオウルフ』の日本語訳は9種発表されているが、その受容はほとんど学問の領域内に留まり、一般の関心をひくまでには至っていません。ましてやこれに挿絵を付けようとの試みは知られていません。『浮世のベアオウルフ』の制作者マリジェーン・オズボーン教授は、この状況を不思議に思ったのでしょうか。解説での口調は「せっかく『ベアオウルフ』の挿絵にぴったりの浮世絵があるのに、灯台下暗し、日本人は気づいていないので、私がやってみた」と言わんばかりです。

1970年代後半から、文学史で扱う正典の見直しが叫ばれて久しいですが、その結果、アメリカの大学における文学史の講義には『源氏物語』が登場し、教則本も複数出版されています。1994年の新チャーター学会では「チャーターと日本の古典文学」の部門があり、2000年には『橋を超えて—中世ヨーロッパと平安女流作家の比較研究』と題する論文集も出版されました。後者には『蜻蛉日記』と『アベラールとエロイズ』、紫式部とクリスティーヌ・ド・ピザンを扱った意欲的な論文が並びます。残念ながら、執筆人に日本の学者は見られませんし、これを書評した人もいません。

この状況を放置しておいてよいのでしょうか。英文学にもましてや国文学にも疎い学生が多くなった現在、文化的な根無し草の日本人が増える傾向にあるのですから。私が強調したい「中世と中世主義を超えて」とはこのことです。